華麗で、聴く者の意表を突く斬新なオーケストレーションにより、ラヴェルとともに管弦楽の魔術師と称されるストラヴィンスキー。初期の作品である《花火》を聴いたという希代のバレエ興行師ディアギレフから与えられた初めての仕事は、ショパンのピアノ曲を《レ・シルフィード》のためにオーケストラ編曲することだった。それに続くのが、バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）のために書かれた、いわゆる“三大バレエ音楽”である。

1910年にパリ・オペラ座で初演された《火の鳥》は、もともとはディアギレフがニコライ・チェレプニンに作曲を依頼した作品だった。しかしチェレプニンは、なぜか途中で作曲を投げ出してしまい、後任としてリヤードフが指名された。ところが、こちらも遅々として筆が進まず、三番手としてお鉢が廻ってきたのがストラヴィンスキーだった。ストラヴィンスキーは、ロシアの民謡や民族舞曲をもとに鮮やかなロマンティックなオーケストレーションを施し、わずか半年で総譜を仕上げたという。

第二弾の《ペトルーシュカ》は1911年、パリ・シャトレ座で初演された。異なった調を同時に演奏する複調性が斬新だったが、1913年にバレエ・リュスがウィーンを訪れた際には、ウィーン・フィルから「いかがわしい音楽」という烙印を押されたという。

ストラヴィンスキーの名を一夜にして知らしめたのは、1913年にパリ・シャンゼリゼ劇場で初演された《春の祭典》だった。複雑極まりないリズムと、常軌を逸したような不協和音の炸裂に、同劇場では怒号の嵐が吹き荒れ、バレエ界と音楽界に一大スキャンダルをもたらした。ただ、念のため付言しておく、この大騒動は一概に音楽のせいばかりではなかったようだ。というのは、《火の鳥》と《ペトルーシュカ》の振付は老練なフォーキンによるものだったが、ディアギレフは《春の祭典》の振付を天才ダンサーであったニジンスキーに任せた。しかし、振付師としては未熟だったニジンスキーは、（作曲者によると）音楽の知識をほとんど有していなかった。さらには、主役を踊る予定だったニジンスキーの妹が妊娠してしまい、急きょ、代役を立てる羽目になったのだ。加えて、生贄の乙女が踊り狂って死んでいくというストーリーは、あまりにも猥雑すぎた……等々。

ペルゴレージらしいしえのイタリア音楽作品をアレンジした《プルチネルラ》は1920年、マシーンの振付によってパリ・オペラ座で初演された。いわゆる新古典主義時代の作品とされる同作はその後、ヴァイオリンとピアノのための《ペルゴレージによる組曲》、チェロとピアノのための《イタリア組曲》、ヴァイオリンとピアノのための《イタリア組曲》と、様々なスタイルに編曲された。本曲は1932年に名チェリスト、ピアティゴルスキーの協力を得て編曲されたもので、5つの楽章から構成されている。

《ペトルーシュカ》からの「ロシアの踊り」は1932年、ヴァイオリニストのドウシュキンとの協業を経てヴァイオリンとピアノのためにアレンジされたもの。

また《春の祭典》の2台ピアノ版は1913年、作曲者自身により書かれた。私的な初演の場でストラヴィンスキーの隣で鍵盤を叩いたのは、あのドビュッシーであったという話が伝えられている。1968年には改訂版が出版された。